

## 中国音楽は術数学か

### ——江永『律呂新義』『律呂闡微』における易図の分析——

田中<sup>たなか</sup>有<sup>ゆう</sup>紀<sup>き</sup>（東京大学東洋文化研究所准教授）

中国において音楽は古くから経学として扱われ、歴代の図書目録においても術数学とは区別して扱われることが多い。その一方、明代以降増加する様々な音楽理論書を紐解けば、象数易と結びつき、暦や度量衡と数理上深く関連しあいながら、天と人との相関を説くものが多いことがわかる。つまり、中国音楽には術数的雰囲気は濃厚であるが、一般的な術数書とは区別して取り扱われているのである。

中国音楽史上、大きな功績を残した劉歆（？－23）・蔡元定（1135－1198）・朱載堉（1536－1611）らの音律学は、一様に術数的世界観を基礎に成り立っている。また、十二平均律に対し、より正確な円周率を利用して朱載堉の理論を計算し直した江永（1681－1763）もまた、十二平均律を河図洛書の学に基礎づけその正統性を論じた。彼が朱載堉の理論を正確に知ったのは晩年になってからであるが、伝統的な音律計算法である三分損益律を支持していた際も、同じように河図洛書の学に基礎付けていた。それでは、江永にとって河図洛書の学は、結局、彼が信じる理論の後付けでしかなく、河図洛書は、その理論に合わせて、いかようにも解釈できる存在でしかないのだろうか。あるいは彼はただ河図洛書を誤解し三分損益律に基礎付けてしまっただけなのだろうか。

本報告ではまず、「中国音楽」の中で、どのような要素が術数であるとみなせるのかを紹介したい。続いて、江永の『律呂新義』（1746）と『律呂闡微』（1757）に豊富にみられる、律と関連付けられた易図を分析する。同じ河図洛書に則りながらも、三分損益律と十二平均律という、異なる二つの理論を導くに至るまでに、江永がどのような思考の過程をたどったのかを具体的に分析したい。以上の分析に基づき改めて、中国音楽において術数学が果たす役割について考え、「中国音楽は術数学か」という問いに対して回答を提示したい。